

年 組 名前：



『争わない』五輪競技があった。堀米雄斗と西矢椛が男女の金メダルに輝いた「スケボー」「スケートボード」のストリート。五輪の新競技だ。悪く言えば、緩い。だが、ピリピリ、ギスギスした勝負の雰囲気は漂ってこない。イヤホンを耳にスタートする選手。「何聴いてるの?」「こんな曲だよ」って、同級生の感じなのだ。たとえるなら、ライバルだが、敵ではない。同じスポーツに励む仲間。トリックと呼ばれる大技に失敗すれば、皆が残念がり、成功すれば喜び合う。「異質」の言葉を、いい意味で使った異質な五輪競技と言えるだろう。テレビ解説者の「鬼やばいっす」「カッケー」のくだけた言葉遣いまで、雰囲気はマッチし、軽さが楽しい。

若者のスポーツ離れを懸念した国際オリンピック委員会（IOC）が採用した都市型アーバンスポーツである。これが五輪競技?の冷ややかな視線もあるが、スポーツの原点は「遊び」ではなかったか。

静岡産業大の寒川恒夫特任

『争わない競技』

教授によれば、そもそもスポーツは「真面目」領域の行動ではなかった。ラテン語に由来し、英国に渡り「気晴らし」などの意味を持った。18世紀のイングランドでは飲酒やギャンブル、観劇などまで含んでいた。

それがパブリックスクールでの運動競技化に伴って変わっていく。心身の教育に役立つとの認識が広まり、クーベルタンの五輪復興に用いられた。「五輪はスポーツが遊び」と手を切った世界に成立した過去を持つ」との見解だ。

その五輪が「遊び」を必要とするなら、大いなる皮肉だろう。現代では、自分を縛るルールの中でパフォーマンスを競うのがスポーツである。ことに日本では、上下関係はじめ競技以外の上からの枠の中で息苦しさを覚えることも少なくない。アスリートには刻苦勉励や困難克服の感動物語が求められることもある。

そんな堅苦しさから解放された新競技だ。米国のライオン文化を体現し、欧州的な伝統とは一線を画す。東京五輪が日本の古い体質をまとめてトラファル続きたったせいとか、スポーツの本質をなす自由と楽しさに目元が緩んだ。

（共同通信編集委員 小沢剛）

『「五輪時想」は随時掲載します。

(2021年7月29日付 山梨日日新聞 14面)

問1

今回の東京五輪から採用された新競技・スケートボードを、コラムの筆者は“争わない競技”と呼ぶ。「ピリピリ、ギスギスした勝負の雰囲気が漂ってこない」「ライバルだが敵ではなく、大技に失敗すれば皆が残念がり、成功すれば喜び合う」…。選手は母国を背負ってメダルを目指して競い合い、観戦者も激しい戦いと感動のストーリーを求めるといふ、そんな五輪の風景の中に現れた新しい競技についてあなたはどのように思いますか。書いてください。

.....

.....

.....

.....

.....